

極限

alg-d

http://alg-d.com/math/kan_extension/

2018年4月11日

定義. C, D を圏, $c \in C$ を対象, $G: D \rightarrow C$ を関手とする. コンマ圏 $c \downarrow G$ の始対象を c から G への普遍射 (universal arrow) という. 即ち, 以下を満たす組 $\langle d, f \rangle$ のことである.

- (1) d は D の対象である.
- (2) f は C の射 $c \rightarrow Gd$ である.
- (3) 組 $\langle d', f' \rangle$ が同じ条件 (即ち $d' \in D$ で $f': c \rightarrow Gd'$ となる) を満たすならば, D の射 $g: d \rightarrow d'$ が一意に存在して $Gg \circ f = f'$ となる.

$$\begin{array}{ccc}
 c & \xrightarrow{f} & Gd \\
 & \searrow f' & \downarrow Gg \\
 & & Gd'
 \end{array}
 \qquad
 \begin{array}{c}
 d \\
 \downarrow g \\
 d'
 \end{array}$$

双対的に, コンマ圏 $G \downarrow c$ の終対象 $\langle d, f \rangle$ を G から c への普遍射という.

$$\begin{array}{ccc}
 & & Gd \xrightarrow{f} c \\
 & \uparrow Gg & \nearrow f' \\
 d & \uparrow g & Gd'
 \end{array}$$

例 1. $U: \mathbf{Ab} \rightarrow \mathbf{Set}$ を忘却関手とする. 集合 X で生成される自由アーベル群を FX として自然な包含写像を $i: X \rightarrow UFX$ とする. このとき FX は以下の性質を満たす: 任意のアーベル群 A と写像 $f: X \rightarrow A$ に対して, 準同型写像 $g: FX \rightarrow A$ が一意に存在し

て $Ug \circ i = f$ を満たす.

$$\begin{array}{ccc} X & \xrightarrow{i} & UFX \\ & \searrow f & \downarrow Ug \\ & & UA \end{array} \quad \begin{array}{c} FX \\ \downarrow g \\ A \end{array}$$

即ち, $\langle FX, i \rangle$ は $X \in \mathbf{Set}$ から U への普遍射である.

この意味で「自由アーベル群」は集合からアーベル群を構成する方法としては一番《自然》と言える. \square

例 2. C を圏, $\Delta: C \rightarrow C \times C$ を対角関手とする. $\langle a, b \rangle \in C \times C$ から Δ への普遍射 $\langle f, g \rangle: \langle a, b \rangle \rightarrow \Delta c$ が存在したとする. このとき, 別の射 $\langle f', g' \rangle: \langle a, b \rangle \rightarrow \Delta c'$ に対して射 $h: c \rightarrow c'$ が一意に存在して次が可換となる.

$$\begin{array}{ccc} \langle a, b \rangle & \xrightarrow{\langle f, g \rangle} & \Delta c \\ & \searrow \langle f', g' \rangle & \downarrow \Delta h \\ & & \Delta c' \end{array} \quad \begin{array}{c} c \\ \downarrow h \\ c' \end{array}$$

これを圏の直積の定義を思い出して書き直すと, 次の可換図式になる.

$$\begin{array}{ccccc} a & \xrightarrow{f} & c & \xleftarrow{g} & b \\ & \searrow f' & \downarrow h & \swarrow g' & \\ & & c' & & \end{array}$$

即ち, $\langle a, b \rangle$ から Δ への普遍射とは余直積 $a \amalg b$ のことである.

同様にして以下の事が分かる.

- $\Delta: C \rightarrow C \times C$ から $\langle a, b \rangle$ への普遍射が直積 $a \times b$ である.
- $!: C \rightarrow \mathbf{1} = \{0\}$ を一意に定まる関手として, 0 から $!$ への普遍射 $\langle c, f \rangle$ が存在とする. このとき c が始対象である. 同様にして $!$ から 0 への普遍射を $\langle c, f \rangle$ とすれば c が終対象である.
- $J := \{ * \leftarrow * \rightarrow * \}$ として $\Delta: C \rightarrow C^J$ を対角関手とすれば, $(x \leftarrow z \rightarrow y) \in C^J$ から Δ への普遍射が pushout である. pullback も同様.
- 同様に, $J = \{ * \rightrightarrows * \}$ の場合が equalizer, coequalizer である. \square

定義. C を圏とする. 圏 J と対角関手 $\Delta: C \rightarrow C^J$ を取る. Δ から $T \in C^J$ への普遍射 $\langle \lim T, \pi \rangle$ を T の極限 (limit), $T \in C^J$ から Δ への普遍射 $\langle \operatorname{colim} T, \mu \rangle$ を T の余極限 (colimit) という.*¹

定義. (1) 圏 J が有限 $\iff |\operatorname{Mor}(J)| < \infty$.

(2) 圏 J が小圏 $\iff \operatorname{Mor}(J)$ が集合.

(3) J が有限の場合の極限を有限極限, 余極限を有限余極限という.

(4) J が小圏の場合の極限を小極限, 余極限を小余極限という.

(5) J が集合 (小離散圏) の場合の極限を小直積, 余極限を小余直積という.

(6) J が有限集合 (有限離散圏) の場合の極限を有限直積, 余極限を有限余直積という.

(7) C が完備 \iff 任意の小極限が存在する.

(8) C が余完備 \iff 任意の小余極限が存在する.

(9) C が有限完備 \iff 任意の有限極限が存在する.

(10) C が有限余完備 \iff 任意の有限余極限が存在する.

命題 3. \mathbf{Set} は完備である. 実際, 小圏 J と $T \in \mathbf{Set}^J$ に対して $\lim T \cong \operatorname{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)$ である.

証明. $j \in J$ とする. $\alpha \in \operatorname{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)$ を取る. $\alpha_j: 1 = \{*\} \rightarrow Tj$ が定まる. そこで $\pi_j(\alpha) := \alpha_j(*) \in Tj$ と置く. これにより自然変換 $\pi: \Delta(\operatorname{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)) \Rightarrow T$ が定まる. これが普遍射であることを示せばよい. その為に集合 x と自然変換 $\sigma: \Delta x \Rightarrow T$ を取る.

$$\begin{array}{ccc}
 \operatorname{Hom}(\Delta 1, T) & \Delta(\operatorname{Hom}(\Delta 1, T)) & \xrightarrow{\pi} T \\
 \uparrow \hat{f} & \uparrow \hat{\Delta f} & \nearrow \sigma \\
 x & \Delta x &
 \end{array}$$

このとき写像 $f: x \rightarrow \operatorname{Hom}(\Delta 1, T)$ を次のように定める. $a \in x$ に対して $f(a): \Delta 1 \Rightarrow T$ を $f(a)_j: 1 \ni * \mapsto \sigma_j(a) \in Tj$ で定める. このとき $\pi \circ \Delta f = \sigma$ である.

∴ $j \in J, a \in x$ に対して

$$(\pi \circ \Delta f)_j(a) = \pi_j \circ f(a) = \pi_j(f(a)) = f(a)_j(*) = \sigma_j(a).$$

*¹ 数学でよく出てくる射影極限 (projective limit)・逆極限 (inverse limit) は極限で, 帰納極限 (inductive limit)・直極限 (direct limit)・順極限は余極限である.

逆に $\pi \circ \Delta f = \sigma$ となるような f が一意であることもわかる。故に π が普遍射であり、 $\lim T \cong \text{Hom}_{\mathbf{Set}^J}(\Delta 1, T)$ となる。 \square

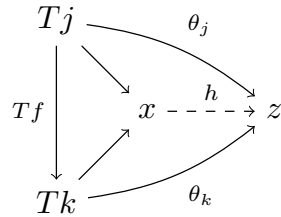
命題 4. \mathbf{Set} は余完備である。

証明. J を小圏, $T \in \mathbf{Set}^J$ を関手とする。 $x := \coprod_{j \in J} Tj$ とする。 $a \in Tj, b \in Tk$ に対して

$$aRb \iff \text{ある } f \in \text{Hom}_J(j, k) \text{ が存在して } (Tf)(a) = b \text{ となる}$$

と定めれば、この R は x 上の二項関係を定める。 R を含む最小の同値関係を \sim として $y := x/\sim$ とおく。 $y = \text{colim } T$ であることを示す。

その為に任意の集合 z と自然変換 $\theta: T \Rightarrow \Delta z$ を取る。 $x = \coprod Tj$ の普遍性により射 $h: x \rightarrow z$ が一意に延びる。



このとき定義から明らかに、 $a, b \in x$ に対して「 $a \sim b$ ならば $h(a) = h(b)$ 」である。故に射 $y \rightarrow z$ が自然に定まる。 \square

この証明は次のように一般化される。

定理 5. 小余直積と coequalizer を持つ圏 C は余完備である。

証明. J を小圏, $T: J \rightarrow C$ を関手とする。 仮定より $\coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj$ と $\coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f)$ が存在する。 各 $f \in \text{Mor}(J)$ に対して $\text{dom } f = j$ となる $j \in \text{Ob}(J)$ が一意に定まるから、 $\text{id}: T(\text{dom } f) \rightarrow Tj$ により射 $p: \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{cod } f) \rightarrow \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj$ が余直積の普遍性により定まる。

$$\begin{array}{ccc} \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) & \dashrightarrow & \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj \\ i_f \uparrow & & \uparrow i_j \\ T(\text{dom } f) & \xrightarrow{\text{id}} & Tj \end{array}$$

一方、各 $f \in \text{Mor}(J)$ に対して $\text{cod } f = k$ となる $k \in \text{Ob}(J)$ が一意に定まるから、射 $Tf: T(\text{dom } f) \rightarrow Tk$ により射 $q: \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) \rightarrow \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj$ が余直積の普遍性により定まる。

$$\begin{array}{ccc} T(\text{dom } f) & \xrightarrow{Tf} & Tk \\ i_f \downarrow & & \downarrow i_k \\ \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) & \xrightarrow{q} & \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj \end{array}$$

仮定より p, q の coequalizer $e: \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj \rightarrow x$ が存在する。 $\eta_j := (Tj \rightarrow \coprod Tj \xrightarrow{e} x)$ と定める。

$$\begin{array}{ccccc} T(\text{dom } f) & \xrightarrow{Tf} & Tk & & \\ i_f \downarrow & & \downarrow i_k & \dashrightarrow \eta_k & \\ \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) & \xrightarrow[p]{q} & \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj & \xrightarrow{e} & x \\ i_f \uparrow & & \uparrow i_j & \dashrightarrow \eta_j & \\ T(\text{dom } f) & \xrightarrow{\text{id}} & Tj & & \end{array}$$

このとき η は自然変換 $\eta: T \Rightarrow \Delta x$ である。

\therefore $f: j \rightarrow k$ を T の射とする。 $\eta_k \circ Tf = \eta_j$ を示せばよい。 まず上の図式の上半分、下半分の可換性から $\eta_k \circ Tf = e \circ q \circ i_f$, $\eta_j = \eta_j \circ \text{id}_{Tj} = e \circ p \circ i_f$ が分かる。 e が p, q の equalizer だったから $e \circ p = e \circ q$ である。 従って $\eta_j = \eta_k \circ Tf$ となる。

η が T から Δ への普遍射であることを示せばよい。 その為に $\sigma: T \Rightarrow \Delta c$ を取る。 このとき $\sigma_j: Tj \rightarrow c$ と coproduct の普遍性から $g: \coprod Tj \rightarrow c$ が得られる。

$$\begin{array}{ccccc} T(\text{dom } f) & \xrightarrow{Tf} & Tk & & \\ \downarrow & & \downarrow & \searrow \eta_k & \searrow \sigma_k \\ \coprod_{f \in \text{Mor}(J)} T(\text{dom } f) & \xrightarrow[p]{q} & \coprod_{j \in \text{Ob}(J)} Tj & \xrightarrow{e} & x \\ \uparrow & & \uparrow & \dashrightarrow g & \uparrow \\ T(\text{dom } f) & \xrightarrow{\text{id}} & Tj & & \\ & & \uparrow \eta_j & \nearrow \sigma_j & \end{array}$$

$g \circ p = g \circ q$ である.

\therefore) $f: j \rightarrow k$ を取る. g の取り方から $\sigma_j = g \circ p \circ i_f$, $\sigma_k \circ Tf = g \circ q \circ i_f$ となる. 今 σ が自然変換だから $\sigma_j = \sigma_k \circ Tf$ である. 故に $g \circ p \circ i_f = g \circ q \circ i_f$ が成り立つ. よって $\coprod T(\text{dom } f)$ の普遍性から $g \circ p = g \circ q$ である.

よって coequalizer の普遍性から $h: x \rightarrow c$ が一意に存在して $h \circ e = g$ となる. このとき

$$(\Delta h \circ \eta)_j = h \circ \eta_j = h \circ e \circ i_j = g \circ i_j = \sigma_j$$

である. よって $\Delta h \circ \eta = \sigma$ である. □

双対を考えれば次も分かる.

定理 6. 小直積と equalizer を持つ圏は完備である. □

同様にして

定理 7. 有限直積と equalizer を持つ圏は有限完備であり, 有限余直積と coequalizer を持つ圏は有限余完備である. □

$T: I \times J \rightarrow C$ を関手とする. $i \in I$ とすれば $T(i, -): J \rightarrow C$ は関手である. よってこの関手の余極限 $\langle \text{colim } T(i, -), \mu_i \rangle$ を考えることができる. (ここで μ_i は自然変換 $T(i, -) \Rightarrow \Delta(\text{colim } T(i, -))$ で, 各 $k \in J$ に対して $(\mu_i)_k: T(i, k) \rightarrow \text{colim } T(i, -)$ は C の射となる.)

定理 8. 各 $i \in I$ に対して余極限 $\langle \text{colim } T(i, -), \mu_i \rangle$ が存在するとき, 関手 $F: I \rightarrow C$ が一意に存在して, 以下の条件を満たす.

- (1) $i \in I$ に対して $F(i) = \text{colim } T(i, -)$ となる.
- (2) $(\mu_i)_k: T(i, k) \rightarrow F(i)$ が自然変換 $(\mu_-)_k: T(-, k) \Rightarrow F$ を定める

証明. $i_0, i_1 \in I$, $j_0, j_1 \in J$, $f: i_0 \rightarrow i_1$, $g: j_0 \rightarrow j_1$ とする. 次は可換である.

$$\begin{array}{ccc} T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_0, j_1) \\ T(f, \text{id}) \downarrow & & \downarrow T(f, \text{id}) \\ T(i_1, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_1, j_1) \end{array}$$

一方次が可換である.

$$\begin{array}{ccc}
 T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_0, j_1) \\
 & \searrow (\mu_{i_0})_{j_0} & \swarrow (\mu_{i_0})_{j_1} \\
 & \text{colim } T(i_0, -) &
 \end{array}
 \qquad
 \begin{array}{ccc}
 T(i_1, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_1, j_1) \\
 & \searrow (\mu_{i_1})_{j_0} & \swarrow (\mu_{i_1})_{j_1} \\
 & \text{colim } T(i_1, -) &
 \end{array}$$

これらを組み合わせて次の図式の実線部を得る.

$$\begin{array}{ccccc}
 F(i_0) = \text{colim}_j T(i_0, j) & \overset{F(f)}{\dashrightarrow} & \text{colim}_j T(i_1, j) = F(i_1) & & \\
 & & & & \\
 & \nearrow (\mu_{i_0})_{j_0} & & \nearrow (\mu_{i_1})_{j_0} & \\
 & & T(i_0, j_1) & \xrightarrow{T(f, \text{id})} & T(i_1, j_1) \\
 & \nearrow T(\text{id}, g) & & \nearrow T(\text{id}, g) & \\
 T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(f, \text{id})} & T(i_1, j_0) & &
 \end{array}$$

実線部は全て可換だから、余極限の普遍性により点線の射が得られる。これを $F(f)$ と定める。すると $F: I \rightarrow C$ は関手である。

∴ $F(f_1 \circ f_0) = Ff_1 \circ Ff_0$ と $F(\text{id}) = \text{id}$ を示せばよい。

$f_0: i_0 \rightarrow i_1$, $f_1: i_1 \rightarrow i_2$ を I の射とする。 $F(f_0)$, $F(f_1)$, $F(f_1 \circ f_0)$ は次の図式により定義されるのであった。

$$\begin{array}{ccccc}
 & & & \overset{F(f_1 \circ f_0)}{\dashrightarrow} & \\
 & & & & \\
 F(i_0) & \overset{F(f_0)}{\dashrightarrow} & F(i_1) & \overset{F(f_1)}{\dashrightarrow} & F(i_2) \\
 & \nearrow & \nearrow & \nearrow & \\
 & & T(i_0, j_1) & \xrightarrow{T(f_0, \text{id})} & T(i_1, j_1) & \xrightarrow{T(f_1, \text{id})} & T(i_2, j_0) \\
 & \nearrow T(\text{id}, g) & & \nearrow T(\text{id}, g) & & \nearrow T(\text{id}, g) & \\
 T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(f_0, \text{id})} & T(i_1, j_0) & \xrightarrow{T(f_1, \text{id})} & T(i_2, j_0) & &
 \end{array}$$

この図式は可換だから、余極限の普遍性により $F(f_1) \circ F(f_0) = F(f_1 \circ f_0)$ である。同様に余極限の普遍性により $F(\text{id}) = \text{id}$ も分かる。

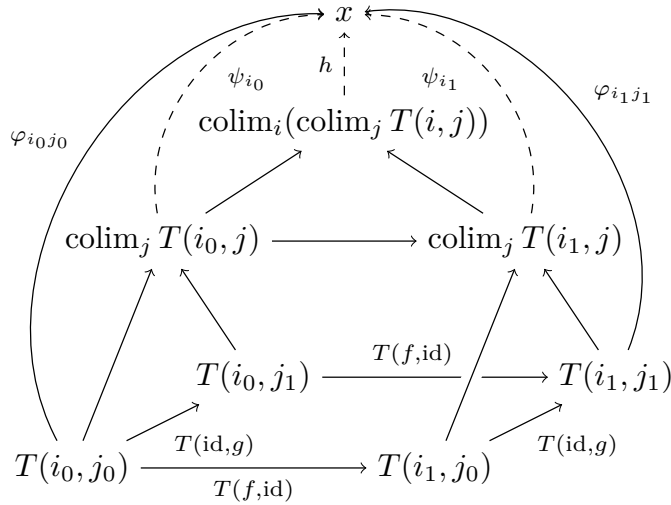
F の定義の仕方から、 $(\mu_-)_k: T(-, k) \Rightarrow F$ は自然変換である。また余極限の普遍性から、このような F は一意であることも分かる。 \square

定理 8 によって得られる関手 F は $\text{colim } T(\square, -): I \rightarrow C$ とでも書くべき関手となるが、このように書いてしまうと何が何なのか分からなくなってしまう。そこで、関手 $G: I \rightarrow C$ に対して $\text{colim}_i G_i := \text{colim } G$ のように「動かす変数」を colim の添え字で表すことにすると、定理 8 で得られた関手 F は $\text{colim}_j T(-, j)$ で表すことができる。

さて、更にこの関手の余極限 $\text{colim}(\text{colim}_j T(-, j)) = \text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ を考えることができるが、一方「 i と j を同時に動かした」ときの余極限 $\text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j) (= \text{colim } T)$ を考えることもできる。

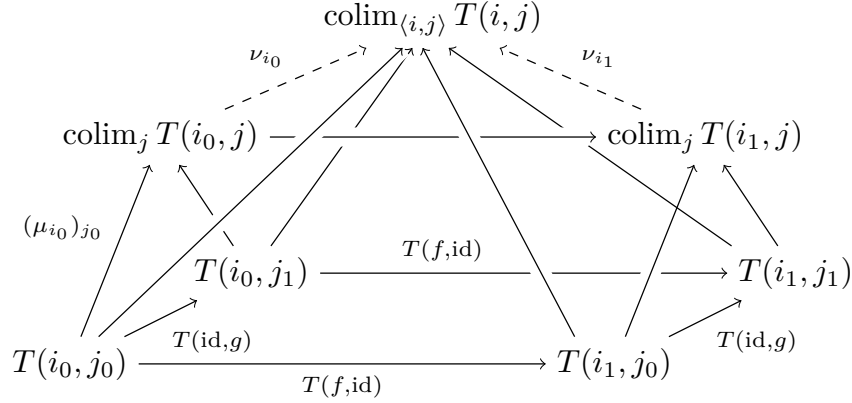
定理 9. $T: I \times J \rightarrow C$ を関手として各 $i \in I$ に対して余極限 $\text{colim}_j T(i, j)$ が存在するとする。このとき、 $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ と $\text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j)$ のうちどちらか一方が存在すればもう一方も存在し、 $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j)) \cong \text{colim}_{\langle i, j \rangle} T(i, j)$ が成り立つ。

証明. $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ が存在したとする。これが T の余極限となっていることを示そう。その為に任意の自然変換 $\varphi: T \Rightarrow \Delta x$ を取る。

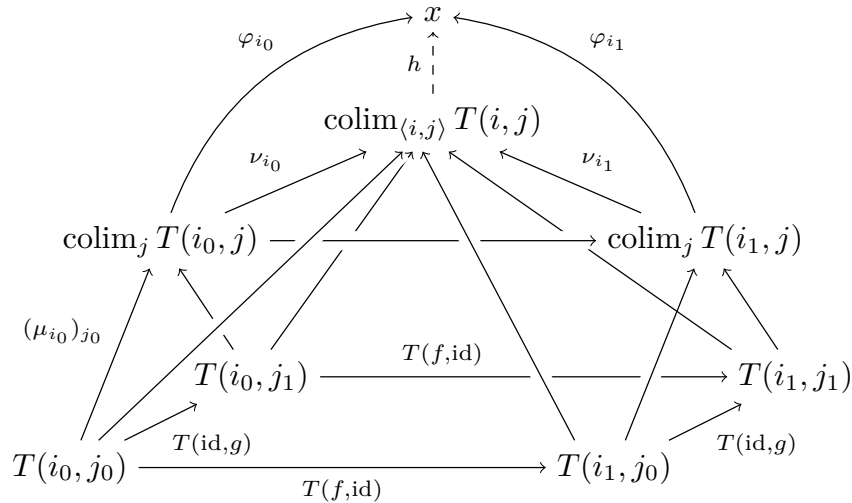


$\text{colim}_j T(i, j)$ の普遍性から、 $\psi_i: \text{colim}_j T(i, j) \rightarrow x$ が存在して図式が可換となる。故に $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ の普遍性から $h: \text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j)) \rightarrow x$ が存在して図式が可換となる。普遍性から、このような h は明らかに一意である。従って $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j))$ が T の余極限であることが分かった。

逆に $\text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i,j)$ が存在したとする.



$\text{colim}_j T(i, j)$ の普遍性から, $\nu_i: \text{colim}_j T(i, j) \rightarrow \text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i, j)$ が存在し可換となる. $\langle \text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i, j), \nu \rangle$ が $\text{colim}_j T(-, j)$ の余極限になることを示そう. その為に任意の自然変換 $\varphi: \text{colim}_j T(-, j) \Rightarrow \Delta x$ を取る.



するとこの図式の実線部は可換だから, $\text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i, j)$ の普遍性により射 $h: \text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i, j) \rightarrow x$ が存在して可換となる. このような h は一意だから $\text{colim}_{\langle i,j \rangle} T(i, j)$ が $\text{colim}_j T(-, j)$ の余極限であることが分かった. \square

よって, (各余極限が存在すれば) $\text{colim}_i(\text{colim}_j T(i, j)) \cong \text{colim}_j(\text{colim}_i T(i, j))$ となることが分かる. 即ち, 余極限の順序は交換可能である. 双対を考えれば, 同様のことが極限についても成り立つことが分かる.

さて, 再び $T: I \times J \rightarrow C$ を関手とする. このとき関手 $\tilde{T}: I \rightarrow C^J$ が得られるので

あった(「自然変換・関手圏」のPDFを参照.)。よってこの余極限 $\text{colim } \tilde{T} \in C^J$ も考えることができる。

定理 10. $T: I \times J \rightarrow C$ を関手として, $j \in J$ に対して余極限 $\langle \text{colim}_i T(i, j), \mu_j \rangle$ が存在するとする. このとき $\text{colim } \tilde{T}: J \rightarrow C$ も存在し, $j \in J$ に対して $(\text{colim } \tilde{T})(j) \cong \text{colim}_i T(i, j)$ が成り立つ. 即ちこの場合, \tilde{T} の余極限は各点ごとに計算すればよい.

証明.

$$\begin{array}{ccccc}
 & & \text{colim}_i T(i, j_0) & \xrightarrow{\text{colim}_i T(i, g)} & \text{colim}_i T(i, j_1) & & \\
 & \nearrow^{(\mu_{j_0})_{i_0}} & & \nwarrow^{(\mu_{j_0})_{i_1}} & & \nearrow^{(\mu_{j_1})_{i_0}} & \nwarrow^{(\mu_{j_1})_{i_1}} \\
 & & T(i_1, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_1, j_1) & & \\
 & \nearrow^{T(f, \text{id})} & & \nwarrow^{T(f, \text{id})} & & \nearrow^{T(f, \text{id})} & \nwarrow^{T(f, \text{id})} \\
 T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_0, j_1) & & & &
 \end{array}$$

$P: J \rightarrow C$ を関手, $\nu: \tilde{T} \Rightarrow \Delta(P)$ を自然変換とする. $i \in I$ に対して $\nu_i: \tilde{T}(i) \Rightarrow P$ も自然変換である. $j \in J$ に対して $(\nu_i)_j: T(i, j) \rightarrow P_j$ となる. 次の実線の可換図式を得る.

$$\begin{array}{ccccc}
 & & P_{j_0} & \xrightarrow{Pg} & P_{j_1} & & \\
 & \nearrow^{(\nu_{i_0})_{j_0}} & & \nwarrow^{(\nu_{i_1})_{j_0}} & & \nearrow^{(\nu_{i_0})_{j_1}} & \nwarrow^{(\nu_{i_1})_{j_1}} \\
 & & \text{colim}_i T(i, j_0) & \xrightarrow{\quad} & \text{colim}_i T(i, j_1) & & \\
 & \nearrow^{T(f, \text{id})} & & \nwarrow^{T(f, \text{id})} & & \nearrow^{T(f, \text{id})} & \nwarrow^{T(f, \text{id})} \\
 T(i_0, j_0) & \xrightarrow{T(\text{id}, g)} & T(i_0, j_1) & & & &
 \end{array}$$

よって余極限の普遍性から $\kappa_j: \text{colim}_i T(i, j) \rightarrow P_j$ を得る. これで得られた四角

$$\begin{array}{ccc}
 P_{j_0} & \xrightarrow{Pg} & P_{j_1} \\
 \uparrow \kappa_{j_0} & & \uparrow \kappa_{j_1} \\
 \text{colim}_i T(i, j_0) & \xrightarrow{\text{colim}_i T(i, g)} & \text{colim}_i T(i, j_1)
 \end{array}$$

は、余極限の普遍性により可換である。従って $\kappa: \text{colim}_i T(i, -) \Rightarrow P$ は自然変換である。このような自然変換 κ は、余極限 $\text{colim}_i T(i, j)$ の普遍性から一意であることが分かるから、 $\tilde{T} \Rightarrow \Delta(\text{colim}_i T(i, -))$ は普遍射であり、 $(\text{colim } \tilde{T})(j) \cong \text{colim}_i T(i, j)$ が分かった。 \square

系 11. 圏 D が余完備ならば D^C も余完備である。双対的に、圏 D が完備ならば D^C も完備である。 \square

例 12. 圏 C に対して $\hat{C} = \mathbf{Set}^{C^{\text{op}}}$ は完備かつ余完備である。 \square

例 13. $\tilde{T}: I \rightarrow C^J$ の余極限が存在したとしても、 $\text{colim}_i T(i, j)$ が存在するとは限らない。例えば $J = \mathbf{2}$ として、圏 C を

$$a \xrightarrow{h} b \xrightleftharpoons[g]{f} c$$

で $f \circ h = g \circ h$ を満たすものとする。 $C^J = C^{\mathbf{2}}$ は C の arrow category である。 $C^{\mathbf{2}}$ の次の図式を考える。(縦向きの射が $C^{\mathbf{2}}$ の対象である。)

$$\begin{array}{ccccc}
 & & c & \xrightarrow{\text{id}_c} & c \\
 & f \nearrow & \uparrow & & \nearrow \text{id}_c \\
 b & \xrightarrow{g} & c & & c \\
 \uparrow h & & \uparrow g & & \uparrow g \\
 a & \xrightarrow{h} & b & \xrightarrow{\text{id}_b} & b \\
 & & \downarrow h & & \downarrow \text{id}_b
 \end{array}$$

この図式は pushout を与えていることが分かる。この図式で、底面の四角が $0 \in \mathbf{2}$ 成分であるが、圏 C において $b \xleftarrow{h} a \xrightarrow{h} b$ の pushout は存在しない。 \square

定義. 関手 $F: C \rightarrow \mathbf{Set}$ が表現可能関手 (representable functor) \iff ある対象 $a \in C$ と自然同型 $F \cong \text{Hom}_C(a, -)$ が存在する。
 また、このとき a は F を表現するという。

命題 14. 表現可能関手 F を表現する対象は同型を除いて一意である。

証明. $F \cong \text{Hom}_C(a, -) \cong \text{Hom}_C(b, -)$ とすれば米田の補題により $a \cong b$ である。 \square

定理 15. $G: D \rightarrow C$ を関手として、 $c \in C$ を取る。このとき c から G への普遍射が存在する $\iff \text{Hom}_C(c, G(-))$ が表現可能関手。

証明. (\implies) $f: c \rightarrow Gr$ を普遍射とする. このとき $\text{Hom}(c, G(-)) \cong \text{Hom}(r, -)$ であることを示す.

$d \in D$ に対して $\varphi_d: \text{Hom}(c, Gd) \rightarrow \text{Hom}(r, d)$ を, $g \in \text{Hom}(c, Gd)$ に対して普遍性により対応する射 $r \rightarrow d$ により定める (次の図).

$$\begin{array}{ccc} c & \xrightarrow{f} & Gr \\ & \searrow g & \downarrow G\varphi_d(g) \\ & & Gd \end{array} \quad \begin{array}{c} r \\ \downarrow \varphi_d(g) \\ d \end{array}$$

このとき φ は自然変換である. 普遍射の性質から明らかに φ は同型である.

(\impliedby) $\varphi: \text{Hom}(c, G(-)) \cong \text{Hom}(r, -)$ を自然同型とする. すると $\varphi_r: \text{Hom}(c, Gr) \cong \text{Hom}(r, r)$ が同型であるから, $f := \varphi_r^{-1}(\text{id}_r) \in \text{Hom}(c, Gr)$ が取れる. $f: c \rightarrow Gr$ が普遍射であることを示す.

その為に $g: c \rightarrow Gd$ とする. $\varphi_d: \text{Hom}(c, Gd) \cong \text{Hom}(r, d)$ を使って $h := \varphi_d(g) \in \text{Hom}(r, d)$ と定義する. このとき φ の自然性から次が可換となる.

$$\begin{array}{ccc} \text{Hom}(c, Gr) & \xleftarrow{\varphi_r^{-1}} & \text{Hom}(r, r) \\ Gh \circ - \downarrow & & \downarrow h \circ - \\ \text{Hom}(c, Gd) & \xleftarrow{\varphi_d^{-1}} & \text{Hom}(r, d) \end{array} \quad \begin{array}{ccc} f & \xleftarrow{\varphi_r^{-1}} & \text{id}_r \\ Gh \circ - \downarrow & & \downarrow h \circ - \\ Gh \circ f & \xleftarrow{\varphi_d^{-1}} & h \\ g & \xleftarrow{\varphi_d^{-1}} & h \end{array}$$

故に $Gh \circ f = g$ で, このような h は明らかに一意だから $f: c \rightarrow Gr$ が普遍射であることが分かった. \square

双対を考えれば

定理 16. $F: C \rightarrow D$ を関手として, $d \in D$ を取る. このとき

F から d への普遍射が存在する $\iff \text{Hom}_D(F(-), d)$ が表現可能関手. \square

例 17. C を圏, $\Delta: C \rightarrow C \times C$ を対角関手とすると, Δ から $\langle a, b \rangle \in C \times C$ への普遍射が直積であった. よって直積 $a \times b$ が存在すれば $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle)$ は表現可能関手である. 定理 15 の証明から $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle) \cong \text{Hom}(-, a \times b)$ となることが分かる. 特に $x \in C$ に対して $\text{Hom}(\langle x, x \rangle, \langle a, b \rangle) \cong \text{Hom}(x, a \times b)$ である. ここで圏の直積の定義から $\text{Hom}(\langle x, x \rangle, \langle a, b \rangle) = \text{Hom}(x, a) \times \text{Hom}(x, b)$ となるので $\text{Hom}(x, a \times b) \cong$

$\text{Hom}(x, a) \times \text{Hom}(x, b)$ である。故に、直積を取る操作と $\text{Hom}(x, -)$ を適用する操作は可換である。

逆に $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle) \cong \text{Hom}(-, r)$ となるような $r \in C$ が存在するならば、定理 15 の証明より $r \cong a \times b$ となることが分かる。また圏の直積の定義から $\text{Hom}(\Delta(-), \langle a, b \rangle) \cong \text{Hom}(-, a) \times \text{Hom}(-, b)$ が分かるから、直積 $a \times b$ とは関手 $\text{Hom}(-, a) \times \text{Hom}(-, b)$ を表現する対象である。□

定義. $T: J \rightarrow C, F: C \rightarrow D$ を関手とし、 T の極限 $\langle \lim T, \pi \rangle$ が存在するとする。 F が極限 $\langle \lim T, \pi \rangle$ と交換するとは、 $\langle F(\lim T), F\pi \rangle$ が FT の極限となることを言う。余極限との交換も同様に定義する。

定理 18. $\text{Hom}_C(c, -)$ は任意の極限と交換する。

証明. J を圏、 $T: J \rightarrow C$ を関手として、 T の極限 $\langle \lim T, \pi \rangle$ が存在するとする。次の図式が関手 $\text{Hom}(c, T-): J \rightarrow \mathbf{Set}$ の極限を与えることを示せばよい。

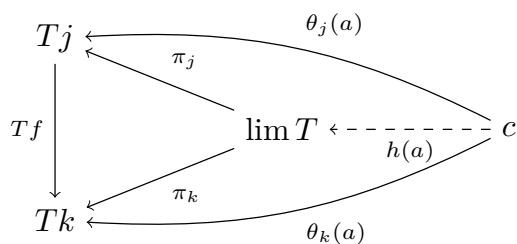
$$\begin{array}{ccc}
 \text{Hom}(c, Tj) & & \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_j \circ - & \\
 & \text{Hom}(c, \lim T) & \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_k \circ - & \\
 \text{Hom}(c, Tk) & &
 \end{array}$$

その為に任意の $x \in \mathbf{Set}$ と自然変換 $\theta: \Delta x \Rightarrow \text{Hom}_C(c, T-)$ を取る。

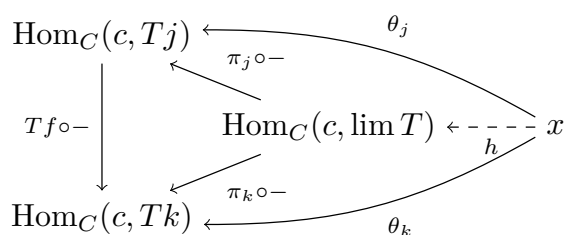
$$\begin{array}{ccc}
 \text{Hom}_C(c, Tj) & \xleftarrow{\pi_j \circ -} & \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_j \circ - & \xleftarrow{\theta_j} \\
 & \text{Hom}_C(c, \lim T) & \\
 \downarrow Tf \circ - & \swarrow \pi_k \circ - & \xleftarrow{\theta_k} \\
 \text{Hom}_C(c, Tk) & \xleftarrow{\pi_k \circ -} &
 \end{array}$$

可換性から、任意の $a \in x$ に対して $Tf \circ (\theta_j(a)) = \theta_k(a)$ である。即ち次の図式の外側の三角形が可換であり、よって $\lim T$ の普遍性から $h(a): c \rightarrow \lim T$ が一意に存在して可換

となる.



この $h(a)$ は写像 $h: x \rightarrow \text{Hom}_C(c, \lim T)$ を与える. 次の図式が可換になることを示せばよい.



即ち, 任意の $a \in x$ に対して $\pi_j \circ (h(a)) = \theta_j$ を示せばよいが, それは $h(a)$ の定義から明らか. 逆に, このような h の一意性も $h(a)$ の一意性から分かる.

以上により $\langle \text{Hom}_C(c, \lim T), \text{Hom}_C(c, \pi) \rangle$ が $\text{Hom}_C(c, T-)$ の極限である. \square

参考文献

- [1] Saunders Mac Lane, Categories for the Working Mathematician, Springer, 2nd ed. 1978 版 (1998)
- [2] G.M. Kelly, Basic Concepts of Enriched Category Theory, Cambridge University Press, Lecture Notes in Mathematics 64 (1982), section 3.3, <http://tac.mta.ca/tac/reprints/articles/10/tr10abs.html>